

## フランクフルト・オーダー教育アカデミーにおける農村学校実習 ―新教育運動との関係に焦点を当てて―

藤井利紀

名古屋大学大学院

日本学術振興会特別研究員

### はじめに

本稿の目的は、教育アカデミー (Pädagogische Akademie) の一つであるフランクフルト・オーダー教育アカデミーの農村学校実習 (Landschulpraktikum) を取り上げ、新教育運動との関係を明らかにすることにある。

ヴァイマル期ドイツのプロイセンにおいて、それまで国民学校教員養成を担ってきた教員養成所 (Lehrerseminar) の全閉鎖に伴い、ヴァイマル期後半を通じて、新たな国民学校教員養成機関である教育アカデミーがあわせて 15 校設立された。教育アカデミーは、ナチスによって教員養成大学 (Hochschule für Lehrerbildung) に改変される 1933 年 5 月まで存続した<sup>①</sup>。大学入学資格が教育アカデミーへの入学条件であったことから分かるように、中等教育段階であった教員養成所とは異なり、教育アカデミーは大学として位置づけられていた。教育アカデミーでは、その設立に大きく関わった文部大臣 C. H. ベッカー (Carl Heinrich Becker, 1876-1933) によって示されていたように、人間形成・教育が重視されており、その理念はヴァイマル期に隆盛を極めた新教育運動の理念と共通するものであった<sup>②</sup>。

さらに、人的構成の面においても、本稿で取り上げるフランクフルト・オーダー教育アカデミーは、アルトナおよびハレ教育アカデミーと同様に、青年運動経験者ならびに新教育運動の担い手である学長が教授団を編成した教育アカデミーであった<sup>③</sup>。実際に、このように編成されたフランクフルト・オーダー教育アカデミーの教授陣は、その略歴から検討する限り、14 人中 10 人は青年運動・新教育運動と何らかの関係をもっていた<sup>④</sup>。それゆえ、これら三つの教育アカデミーは新教育運動との関係があったと推察される。

教育アカデミーに関する近年の先行研究は、政治的観点から教育アカデミーの設立過程

を検討した研究<sup>5)</sup>と、教育アカデミーの教員養成の実態にせまる研究の二つに分けることができ、特に後者の研究の中でアルトナおよびハレ教育アカデミーと新教育運動との密接な関係が指摘されてきた。例えば、渡邊隆信はアルトナ教育アカデミー教授陣の人事を検討し、その多くの教員が青年運動を含む新教育運動の経験者であったことを明らかにしている<sup>6)</sup>。さらに、對馬達雄・佐藤史浩はハレ教育アカデミーの教授陣であった A. ライヒヴァイン (Adolf Reichwein, 1898-1944) が中心となり行われていた農村学校実習が新教育運動の影響を受けていたことを明確にしている<sup>7)</sup>。

これら二つの研究は、教員人事もしくは特定の個人による教員養成活動という限られた領域に焦点を当てているが、教育アカデミーと新教育運動との関係をさらに広く言及しているものとして W. ヴェルトの研究が挙げられる<sup>8)</sup>。ヴェルトは、ハレ教育アカデミーの教員養成活動を理論と実践の観点から検討し、教授学、農村学校実習などの授業や教育アカデミーにおける教員と学生との関係が新教育運動の影響を受けていたことを明らかにしている。以上のように、すでに先行研究において農村学校実習と新教育運動との関係は指摘されている。その上で、本稿でフランクフルト・オーダー教育アカデミーの農村学校実習を取り上げるのは、それをハレの農村学校実習と同一のものとして捉えることはできないからである。なぜなら、二つの教育アカデミーの農村学校実習の形態は大きく異なっており、農村学校実習と新教育運動との関係も異なると予想されるからである。

ヴェルトの先行研究ではハレ教育アカデミーの農村学校実習で採用されたキャンプ方式が新教育運動の影響を受けていたことが指摘される<sup>9)</sup>。しかし、農村学校実習と新教育運動との関係についてはこの点が言及されるにとどまっている。そのため、ヴェルトの研究に対して、二つの問題点を指摘できる。一つ目は、農村学校実習の中心部分を占めていた授業実習と新教育運動との関わりについては明らかにされていないことである。二つ目は、農村学校実習が新教育運動の影響を受けていたという限定的な影響しか言及されていないということである。フランクフルト・オーダー教育アカデミーの農村学校実習を仔細にみていくと、農村学校実習を媒介することによって、農村学校教員に新教育運動の実践を普及させる機能をもっていたとみなすことが可能であり、農村学校実習と新教育運動との関係をより豊かなものとして捉えることができるだろう。

以上のことを踏まえて、本稿では先行研究で取り上げられておらず、ハレとは異なる側面から教育アカデミーと新教育運動との関係を多角的に検討することが可能であるフランクフルト・オーダー教育アカデミーの農村学校実習を取り上げる。具体的な作業として、はじめに教育課程における農村学校実習の位置づけを確認し、次に農村学校実習の活動を明らかにしながら、そこで行われた授業実習が新教育運動からどのような影響を受けていたのかを考察し、最後に農村学校実習と新教育運動との関係から、農村学校教員が農村学

藤井利紀「フランクフルト・オーダー教育アカデミーにおける農村学校実習―新教育運動との関係に焦点を当てて―」校実習をどのように受け止めていたのかを検討する。用いる史料は、フランクフルト・オーダー教育アカデミーによって編纂された機関誌『二年の教員養成』に採録された授業記録、文部省への報告資料、フランクフルト・オーダーの地方紙である『オーダー新聞』の記事などである。さらに、教育雑誌『国民学校』に掲載された学長執筆の記事や学生雑誌『教育アカデミー学生』の報告誌に掲載された学生による論考も用いる。他に、機関誌に収録されていない『オーダー新聞』の記事も使用する。

## 1. 教育課程における農村学校実習の位置づけ

### (1) 座学と実習の相互関連性

教育アカデミーが設立されたフランクフルト・オーダーは、プロイセンの東部に位置しており、現在のドイツとポーランドとの国境線であるオーダー川に面しており、ベルリンと運河によって結ばれているプロイセンの交易都市であった。人口は約 71,000 人であり、フランクフルト・オーダーは、約半数の教育アカデミーが設立された人口 20 万人以上の大都市ではなく、中都市に分類された<sup>(10)</sup>。さらに、フランクフルト・オーダーが位置したフランクフルト行政区域は 1931 年の時点で、国民学校が 1474 校あったが、そのうち農村学校と称される単級学校 728 校、2 学級学校 209 校であり、一方学年別編成がほぼ可能であり、都市学校とみなされる 7 学級・8 学級学校をあわせて 129 校であった<sup>(11)</sup>。それゆえ、フランクフルト・オーダー近郊は都市学校より小規模な農村学校がかなり多く占めている地域であり、農村学校実習はフランクフルト・オーダーの置かれた状況から重要な活動であったことがうかがえる。

教育アカデミーは 2 年制であり、半年を一つの学期とし、1 学期から 4 学期で構成されていた。学生は 2 年間に、教育学や教授学の講義・演習、さらに学校実習などに参加していた。これらの授業の中で、農村学校実習は 1 学期から 3 学期にかけて行われる学校実習の一つに位置づけられた。実習として 1 学期に、教育観察実習が行われ、そこでは約 10 人の学生と週ごとにかわる教員がグループとなって、都市学校あるいは農村学校において週 1 回午前に授業見学をしていた。2 学期には、学生たちは週 3 時間、任意の一つの科目を都市学校と農村学校で教える授業実習を行っていた。3 学期は、農村学校実習と都市学校実習 (Stadtschulpraktikum) がそれぞれ 3 週間ずつ集中的に行われた<sup>(12)</sup>。これら二つの集中実習は授業実習だけにとどまらず、学校活動全体を体験する実習であった。このように、農村学校実習は授業見学、授業実習と段階的に続く学校活動全体を経験する集中実習として実施された。

しかし、学校実習が行われるのは 3 学期までであった。4 学期はフランクフルト・オーダー教育アカデミーの機関誌によれば次のように位置づけられた。「4 学期は基本的に固有

の授業実践はなくなり、その際、学生たちの時間と力は4学期の主要な学習のために自由にして、精神科学的学習のために取って置かなければならない<sup>(13)</sup>。4学期では、講義、演習や卒業試験論文作成といった活動に十分な時間が当てられた。

こうした4学期は、農村学校実習とも関連づけられていた。フランクフルト・オーダー教育アカデミーの学長O. ハッセ (Otto Haase, 1893-1961) は農村学校実習と4学期の関係を次のように述べている。「4学期間の学習の中で農村学校実習を3学期の中心に置くことが最も適している。休暇へ置くことは望ましくない。なぜなら、その際アカデミーは中心にある授業という現実を断念し、その影響を成り行きに任せるからである。こうした体験の際に、教育アカデミー教員は積極的に協力しなければならず、さもなければ、4学期の中心を占める活動は宙に浮いてしまうだろう<sup>(14)</sup>。このように、農村学校実習を休暇ではなく学期中に行うことによって、教育アカデミー教員が実習の際に学生を積極的に指導できるようにして、そこから生じた実践的課題を4学期のためにつなげることを可能にしていた。

一方、学生はより具体的に農村学校実習と4学期の関係を次のように述べていた。「農村学校実習の経験によって、我々の誰もがはじめて、今までの理論活動の価値基準が与えられる。何が実践に役立ったのか。何が欠けているのか。何がもったいぶったままだったのか。それによってこのような実践である3週間の農村学校実習の結果から4学期の理論学習が構成する原則が明らかになる<sup>(15)</sup>。学生によれば、2学期までに講義や演習で学んできた理論を3学期の農村学校実習で試し、同時にその実践の成果や反省を4学期の授業につなげていた。つまり、四つの学期の中で講義・演習－実習－講義・演習というように座学と実習とが相互に関連づけられていたのであった。

## (2) 農村学校実習の事前準備

ここまで、農村学校実習が学期間をつなぐ重要な役割を担っていたことを論じてきたが、農村学校実習は同学期の週7時間の「教授学」の協同講義 (Kollektivkolleg) とともに直接結びつけられていた<sup>(16)</sup>。協同講義はフランクフルト・オーダー教育アカデミー固有の活動であり、1人の教員が担当するのではなく、複数の教員が一つの科目の授業を担当することに特徴があった。「教授学」の授業は、大きく分けて二つの部に分かれており、その前半部分が主に農村学校実習の準備時間にあてられていた。講義録から抜粋すると、第1部の授業内容は以下の通りであった。

「授業は6時間の教授学の基礎からはじまる。次に、16時間のグループ活動が続く (学生たちによる計画 (プロジェクト) の実践的な構想)。それは具体的に決められた一つのクラスのための活動計画の立案である。実践的に細部までおよぶ下記の企画が実行

藤井利紀「フランクフルト・オーダー教育アカデミーにおける農村学校実習―新教育運動との関係に焦点を当てて―」  
される。

ミュールローゼ市の郷土の本、フランクフルト・オーダー市の動物の写真本・歴史図表・経済地図、学校庭園の建設、教育アカデミーの新しい建築や飛行場・空軍基地に関する活動。

全員による5時間のグループ報告と批評が続き、さらに中部オストマルクの単級農村学校での「自由な総合学習 (freier Gesamtunterricht)、訓練 (Training)、計画 (Vorhaben)」というアカデミーの計画の実践的な実施についての4時間にわたる講義が連続する。ここまでが3学期の農村学校実習に接続する。それでもって講義の第1部分が終わり、その目的は基本的な国民学校の理論を発展することやこうした理論を実践の中で直接試すことである<sup>(17)</sup>。

「教授学」の授業録から、二つのことがうかがえる。

第1に、グループ活動や講義を通じて、農村学校実習のための具体的な事前準備が行われていたことが分かる。学長ハッセも「主に述べられたあるいは書かれた言葉やミニチュアの授業実習によって実践的な活動の準備はできない。むしろ、決められた時間の中ですでにアカデミーにおいて、できる限りすべての細部と取り扱いまで具体的に授業計画を行なわなければならない<sup>(18)</sup>」と述べるように、農村学校実習のために特別な準備が必要とされ、「教授学」の中でこうした事前学習が念入りに行われていた。

第2に、グループ活動やそれに引き続く「自由な総合学習、訓練、計画」というテーマの講義において、作業教育を取り入れた郷土学習、学校庭園活動などの労作教育を含んだ計画(プロジェクト)、総合学習といったように、新教育運動を代表する題目が取り扱われていたことが挙げられる。その中でも、「自由な総合学習、訓練、計画」という講義のテーマは、以下に示す学長ハッセの国民学校の教育課程編成上の考え方と同じであったと推察できる。

「時間通りの教科授業、いわゆる制限された総合学習や共通の教材が集められた事実教授 (Sachunterricht) の代わりに、国民学校の授業活動の中で次の三つの領域が生じる。1. 学校活動の刺激と推進力としての自由な総合学習。2. 話す、描く、読む、書く、計算、あらゆる種類の物作り、音楽演奏といった形式的な能力と実用的な技能の訓練。3. 活動のリズムに応じて分けられた年月の流れないしは季節の流れに依拠した計画の構想(傍点は著者)」<sup>(19)</sup>。

ハッセの国民学校の教育課程編成上の考え方は「自由な総合学習、訓練、企画」という講義のテーマと一致しており、彼の考えが講義に直接反映されていた可能性が高い。さらに、ハッセは国民学校において、基礎能力や実用的な技能を訓練しつつ、自由な総合学習やプロジェクト学習を取り入れることを推奨しており、彼のこうした教育課程編成上の考

え方には、新教育運動を代表する実践が含まれていたことがうかがえる。このような背景には、ハッセが青年運動・新教育運動と密接に関わっており、田園教育舎系学校で教員を務めるなど新教育運動を実際に経験していたことがあるだろう。

## 2. 農村学校実習における活動

1931 年 10 月 25 日の『オーダー新聞』で「フランクフルト・オーダー教育アカデミーはキャンプで活動するハレと並んで、実践的な教員養成の新しい試みを行った」<sup>(20)</sup>と述べられていたように、フランクフルト・オーダーの農村学校実習はハレ教育アカデミーのそれと並び立つ特徴的な実践であった。ここでは、ハレとの違いを意識しながら、フランクフルト・オーダー教育アカデミーの農村学校実習活動を明らかにしていく。その際に、農村学校実習に関する五つの史料を検討する。具体的には、フランクフルト・オーダー教育アカデミーの機関誌に収録された『オーダー新聞』の 1931 年 10 月 25 日の記事と、教育アカデミー教員によって行われたと推定される文部省への報告資料を用いる。さらに、機関誌に再録されていない『オーダー新聞』の 1931 年 7 月 8 日の記事ならびに教育雑誌に掲載された学長ハッセや学生雑誌に掲載された学生の論考を使用する。

### (1) 共同体の一員としての農村生活体験

1931 年 6 月 14 日から 7 月 4 日の日程で、農村学校実習は実施された。実習の初日に、学生と教育アカデミー教員らは、学生 18 名教員 1 名を一つの単位として五つのグループに分かれ、それぞれの地区のユースホステルに向かった。到着すると、彼らはそこで督学官と農村学校教員に会い、そのままユースホステルに宿泊した。次の日、学生は配属された農村学校に向かい、その日の活動を終えて、宿泊先まで戻ってきた。

しかし、学生がユースホステルに宿泊するのは、実習の 3 日目までであった。それ以降、学生は自身で村の中に宿泊地を見つけなければならなかった。教育アカデミー教員によれば、学生は「国民学校教員の家、牧師の家、大地主の家、農家、居酒屋」に宿泊しており、その狙いは「学生が直接生き生きとした現在の村を観察すること」にあった<sup>(21)</sup>。一方、学生たちも教員が意図するように、村の中に宿泊することで「村の住民と村の住民が生活する生活環境を即座に知ることができる」<sup>(22)</sup>と述べていた。このことは、10 月 25 日の『オーダー新聞』においても、同様に述べられていた。「最初のユースホステルは人がいなくなっていた。学生たちは、学校の子どもがいる場所で生活した。学生たちは毎週日曜日に教会でオルガン演奏し、女性支援祭 (Frauenhilfefest) のときにレストランのホールの舞台に立ち、午後には子どもたちと水泳し、夜にはゲストとして合唱団や学校理事会に参加した」<sup>(23)</sup>。このように、学生は子どもたちと遊ぶことに限らず、オルガンを演奏したり、村

藤井利紀「フランクフルト・オーダー教育アカデミーにおける農村学校実習―新教育運動との関係に焦点を当てて―」の祭りに参加したりするなど、共同体の一員として農村生活に打ち込んでいた。

こうしたフランクフルト・オーダーの農村学校実習の形態はハレ教育アカデミーとは大きく異なっていた。ハレの場合、午前中に学生が農村学校に行くのはフランクフルト・オーダーと同じであったが、午後は農村学校から離れたテントで過ごすキャンプ方式をとっていた。確かに、学生は村の祭りに参加することはあったものの、農村学校や農村との間に、一定の距離が置かれていた。こうした取り組みには、学生が保守的な側面をもった農村学校にすぐに適応するのを防ぐ意図があったとされる<sup>(24)</sup>。つまり、ハレの場合、農村から離れたテントで過ごすことによって、農村学校や農村を客観視することが重視されていたのに対して、フランクフルト・オーダーの場合、農村に宿泊をして、共同体の一員として農村生活に関わる直接的な経験が重視されていたのであった。

## (2) 新教育運動の影響を受けた授業実習

農村学校実習では、農村生活体験とともに農村学校での授業実習も重視された。五つのグループに分かれていた学生たちは、さらにそれぞれ2から3名の小グループを作り、それぞれの農村学校に行き、午前中に授業実習を行った<sup>(25)</sup>。一方、教育アカデミー教員は自転車を使って農村学校を巡回して、午前中に学生の授業実習を見学し、午後は学生や農村学校教員と議論をしながら助言を行っていた<sup>(26)</sup>。

実際に、授業実習では、どのような授業が実施されていたのだろうか。10月25日の『オーダー新聞』は、農村学校実習で学生たちがどのような授業を行っていたのかを明らかにしている。新聞では、フランクフルト・オーダーの農村学校実習の様子を伝える前に、以下のように一般的な国民学校の様子を例に挙げていた。

「私は数日間、新しい辺境の一つの村で、12歳から14歳の農民、農民労働者、移民の子どもへの地理の時間の授業を聞いた。テーマは自然的な内容であり、ギリシャ、ロトピ山脈、コルフ、イピラス、イタカ、アクロポリス。位置、境界、面積が扱われる。このことを要求する授業計画がある。何のために。教師がこのことを尋ねるよりも、教室の壁を壊した方が早かっただろう。干しブドウとコリント式の建物が、子どもたちがギリシャに関心をもち、そこから自分の身近なものになることであった。どれくらいのエネルギーと訓練の費用を一般教育の幻想に無駄遣いをしてきて、無駄遣いをしようとするのか。小さな電車とともに、毎日その場所で鐘をならす、(ときどき干しブドウを運ぶ) 機関士がどのような仕事をしているかは学校にいる子どもは経験できないだろう。人々はみな、一度は授業をし、学んだ。それは旅行なしの地理、政治なしに歴史を扱うこと、庭・家畜小屋なしでの生物学、実験なしの物理、毎週日曜日午後に行われる文学であった」<sup>(27)</sup>。

ここでは、国民学校で行われる授業が、子どもたちの関心や経験に沿っていないことが述べられている。具体的に旅行なしでの地理や、庭や家畜小屋なしでの生物学の授業などが引き合いに出され、子どもたちの体験や経験に基づかない教育が否定的に捉えられている。それに対して、フランクフルト・オーダー教育アカデミーの農村学校実習は次のように評価された。

「フランクフルト・オーダー教育アカデミーは3週間の実習のために、かつての教授法を示唆することなく、他の異なる一つの基礎に基づいた授業計画を打ち立てた。教員についての初学者の活動に関わる問題であるにもかかわらず。(中略) 実習の間における私たちの授業プロジェクトあるいは「計画」は、子どもの個人的な要求とその村の環境の実際的な要求に由来する、若い教員とそれぞれの教室、学年あるいは学校の共同活動であった。何らかの形で、まがりなりにも認識できる限りでは。そこではスポーツの対抗試合、遊び、映画、展示会、父母会の夕べ、夏至祭、シュタイン祭が用意された。決まった学校庭園活動が行われ、噴水が作られ、駅、パン屋、鍛冶屋の見学を行って、それをカードに書いて、郷土の本、動物の本、模型の作成、地図を作製した」(傍点は著者)<sup>(28)</sup>。

このように、農村学校実習での授業実習は「かつての教授法」と対比的に描かれている。「かつての教授法」は具体的に示されていないものの、引き合いに出されていた一般的な国民学校のように知識教授を重視し、子どもの興味や関心を惹き付けることが困難な教授法であったと推定できる。それに対して、農村学校実習では子どもの個人的な要求や地域に由来する教育が行われたと評価された。こうした教育は、子どもの興味や関心を重視するという点で児童中心主義的な教育であり、農村学校実習で実施されていた授業実習が新教育運動から大きな影響を受けていたことがうかがえる。

さらに、上の引用からは、「教授学」の講義で事前準備を行っていたように、学校庭園・噴水を作るといった劳作教育や、見学をして本・模型・地図を作成するといった作業教育が行われていたことが分かる。これらの劳作教育や作業教育は、新教育運動を代表する取り組みであり、子どもたちの主体的な活動を重視するものであった。こうした授業は7月8日の『オーダー新聞』で次のように評された。

「学校活動はもちろん完全な近代精神の中で行われた。常日頃から戸外で作業を行ったり、歌を歌ったり、授業では土地と結びつけられ、地域や環境の特徴と関連づけられ、砂場では観察授業が行われ、砂に絵を描いたり、砂で何かを作ったり、砂場で体操したり、遊んだりしていた。以上の活動すべてが、住民からの見学者が全体の意味を全く理解することができないということをとくに強く引き起こす劳作学校の原理、すなわち子どもたちの活動的な協同の原理の最大限の強調のもとにあった。しかし国民学校教員や

藤井利紀「フランクフルト・オーダー教育アカデミーにおける農村学校実習―新教育運動との関係に焦点を当てて―」

子どもたちにとってすべての催しは大きな関心と多くの刺激を与えた」<sup>(29)</sup>。

この記事からも、授業実習で労作活動が行われ、子どもたちの主体的な活動を重視していたことがうかがえる。こうした授業は、実際に農村学校教員と子どもたちの興味を惹き付けていたと評価されており、新教育運動の理念が実現していたとみることができよう。

### 3. 農村学校教員による農村学校実習の受け止め方

フランクフルト・オーダーの農村学校実習の中心的なねらいは、学生に農村学校や農村を直接体験させることにあった。一方でその意図を超えて、農村学校実習が農村学校教員に影響を与えていた可能性はないだろうか。実際に農村学校教員は授業計画を作成するのに関わったり、週に1、2回、学生、教育アカデミー教員、督学官と一緒に総合会議をしていたりした。総合会議では、「釈明が行われ、それぞれの学生が作業計画に応じて行った『計画』が題材にされ、生徒の作品が示され読み上げられ、助言が与えられ、起きた失敗が大胆に認められた」とされる<sup>(30)</sup>。こうした授業実習の振り返りは、農村学校教員にとって、授業実習中に実践されていた新教育運動の大きな影響を受けた授業について議論する場であり、今までの授業を見直す機会になったと考えられる。本章では、第2章で用いた史料を主に用いながら、農村学校教員が農村学校実習をどのように受け止めていたのかを明らかにする。農村学校教員自身の記述を用いていないという点で、間接的であるものの、農村学校教員がどのように農村学校実習と関わっていたのかを知ることができる。

はじめに取り上げる10月25日の『オーダー新聞』によれば、教育アカデミー学生と教員、農村学校教員が集合した授業会議では「年長の教員は批判をし、疑念をいただき、警告をした。世代は互いに衝突し合った」<sup>(31)</sup>と述べられていた。このように、農村学校実習における授業実践が年長の農村学校教員に受け入れられず、対立していたことが示唆されている。

それに対して、教育アカデミーの学長・教員の記述から、農村学校教員が教育アカデミーの農村学校実習に好意的であったことが分かる。学長ハッセは次のように述べていた。「ほとんどすべての農村学校教員ははじめて新しい教員養成を経験した。接触後、とても喜ばしい協力があつた。学校の現実状態と青年の新しい意思とのこのような実りある対面に、一もちろん意図していないが一こうした農村学校実習の最も力強い影響があつた」<sup>(32)</sup>。ここでは、教育アカデミーが行った教員養成は農村学校教員にとって新しいものであったにもかかわらず、農村学校教員の大きな協力が得られ、学生が充実した実習を行うことできたことが示されている。

さらに、教育アカデミー教員によって行われたと推定される農村学校実習に関する文部省への報告では、以下のように示されていた。

「学校督学官と教員の姿勢は個々の点はともかく私たちの活動に対してかなり積極的であった。農村教員はアカデミーの提案を受け入れ、検討しているという印象を私は直接もった。もしかしたら、このような学外実習の形態の本質的な成功はひょっとすると、こうした確証済みの経験とアカデミーの意志との対面にあるのかもしれない」<sup>(33)</sup>。

教育アカデミー教員の証言ではあるが、ここでも、農村学校教員が教育アカデミーの授業実践に積極的な関心を持ち、それらを熟慮していたことが述べられている。さらに、農村学校実習の大きな成功として、農村学校教員の農村学校経験と教育アカデミーの意志がうまく接合していたことが挙げられていた。

他方、学生は農村学校教員について次のように述べていた。

「ほとんどの場合、成果の豊かな共同作業が実現した。国民学校教員の側から、私たちの新しい計画に困難—むしろ批判といってもいいが—が立ちはだかることはなかった。教育アカデミー教員および学生と督学官および農村教員との共同作業は、共同のグループ会議によって支えられている。この会議は週1、2回行われ、この会議ではたいてい議論の余地がある質問が投げかけられ、その会議は新しい教員養成との出会いから生じるものであり、この会議は正しい人間的な態度のみを保持しているのであれば、そこにあるものが新しいこととあまりにも大きく衝突せずに、いかにして新しいことをはじめることができるのかを示している」<sup>(34)</sup>。

ここでも、学生側からの証言ではあるが、農村学校教員が農村学校実習にかなり協力的であったことが分かる。さらに、農村学校教員、学生、教育アカデミー教員の共同会議の議論を通して、教育アカデミーの新しい授業実践を農村学校教員が批判するのではなく、取り入れていたことがうかがえる。

一方で、こうした学生の発言から、農村学校教員が実習の困難となり、実習に批判をしてくるのではないかという不安感が実習前に伴っていたことも読み取れる。学生は農村学校実習における成功として、農村学校教員と教育アカデミーの関係を作れたことをあげ、以下のような利点を述べていた。「確かに、少なくとも教職初年度の私たちの活動を軽減するだろう。そのような農村学校実習が毎年同じように、アカデミーと農村学校教員の共同活動との関連で成功するならば、それによって若い教員は将来、とても多くの困難を省くことができる」<sup>(35)</sup>。このように、農村学校実習は教育アカデミーの学生が将来、農村学校教員になったときの不安を取り除くものでもあった。学生が農村学校実習の期間に限らず、農村学校に赴任した後にも、新教育運動と関連する授業実践を行っていくには、農村学校教員との密接な関係をもつことや、すでに教育アカデミー在学中から農村学校を体験していることは、重要であっただろう。

以上のように、農村学校実習は農村学校教員に好意的に受け止められていた。確かに、

藤井利紀「フランクフルト・オーダー教育アカデミーにおける農村学校実習―新教育運動との関係に焦点を当てて―」  
10月25日の『オーダー新聞』で示されているように、教育アカデミーの新しい授業実践に対する批判もあり、農村学校教員全員が受け入れていたとはいえない。しかし、教育アカデミー教員や学生の記述から、多くの農村学校教員が教育アカデミーの新しい授業実践を受け入れていたことが分かる。フランクフルト・オーダーの農村学校実習は、保守的な農村学校の影響を恐れて農村学校と距離をとっていたハレの農村学校実習とは異なり、農村学校や農村学校教員と積極的な関わりをもっていた。それゆえに、農村学校実習を媒介することによって、農村学校教員にも新教育運動の実践を普及させる機能をもつことができたのであった。

## おわりに

本稿では、フランクフルト・オーダー教育アカデミーの農村学校実習に焦点を当てて、農村学校実習が教育課程の中で座学と実習の関連の中で実践部分を担っていたことを明らかにした上で、新教育運動との関係を検討してきた。得られた結論は2点にまとめられる。

第1に、授業実習の実態を検討し、農村学校実習では、新教育運動の影響を受けた授業実習が行われていたことが明らかとなった。そこでは、子どもたちの経験や要求に基づいた授業を行うことが重視され、実際に新教育運動を代表する労作教育や作業教育が取り入れられていた。さらに、授業実習の準備学習として位置づけられていた「教授学」においても、新教育運動の影響を受けたグループ活動や講義が行われていた。

第2に、農村学校実習を媒介することによって、農村学校教員に新教育運動の実践を普及させる機能をもっていたということである。確かに、農村学校教員との対立が示唆されていたように、すべての農村学校教員に受け入れられていたとは言えないものの、教育アカデミー教員や学生の記述から、多くの農村学校教員が教育アカデミーの授業実践を積極的に受け入れていたことがうかがえる。このことは、ハレとは異なり、フランクフルト・オーダーの農村学校実習が、学生を共同体の一員として農村生活に関わらせる直接的な経験を重視していたように、積極的に農村学校や農村学校教員と関わっていたことから生まれるものであった。

このように、農村学校実習が農村学校教員に新教育運動の実践を普及させる機能をもっていたことは、新教育運動の広がりを考える上で重要な意義をもっている。つまり、農村学校実習を媒介にして農村学校教員に働きかけることによって、主に一部の私立学校や実験学校という限られた範囲で行われていた新教育運動の実践を、一般的な公立学校である国民学校にも普及させる可能性をもっていた。フランクフルト・オーダー教育アカデミーの農村学校実習は、新教育運動の影響を受けていたことにとどまらず、新教育運動の実践を広げていくという役割も担っていたのであった。

農村学校実習は、フランクフルト・オーダーとハレ以外に少なくとも、ドルトムント、フランクフルト・マイン、キール教育アカデミーでも実施されていた。これらの教育アカデミーの農村学校実習がどのように行われ、新教育運動との関係がどのようなものであったかを明らかにすることは、今後の課題としたい。さらに、ナチスに改変された教員養成大学においても継続された農村学校実習がナチスによってどのように変えられたのかを検討することも残された課題として挙げられる。

### 【注】

- (1) 本稿で取り上げるフランクフルト・オーダー教育アカデミーなどあわせて 8 校は、緊縮財政のために 1932 年に閉鎖された。
- (2) 教育アカデミーの理念に関する代表的な先行研究として、佐藤史浩「プロイセンの教育アカデミーの理念」『宮城学院女子大学研究論文集』第 105 号、2007 年、95-111 頁が挙げられる。
- (3) フランクフルト・オーダー、アルトナ、ハレ教育アカデミーはいずれも 1930 年に設立されており、他の教育アカデミーと異なり、教授団の編成は、内定した学長に認められていた (Wolfgang Werth: *Die Vermittlung von Theorie und Praxis in den Preussischen Pädagogischen Akademien 1926-1933. Dargestellt am Beispiel der Pädagogischen Akademie Halle/Salle(1930-1933)*, Dipa-Verlag, 1985, S. 85.)。これらの教育アカデミーでは、ノール (Herman Nohl, 1879-1960) とフリットナー (Wilhelm Flitner, 1889-1990) の勧め通りに、文部大臣ベッカーが青年運動出身者を学長に充てたとされる (Wolfgang Keim/ Ulrich Schwerdt(Hrsg.): *Handbuch der Reformpädagogik in Deutschland (1890-1933)*, Peter Lang, 2013, S. 747.)。新教育運動に関わっていた多くの人が、同時にヴァンダーフォーゲル運動などに関わる青年運動出身者でもあった。
- (4) 略歴については、A. ヘッセがまとめた教育アカデミー教員の履歴書を用いている (Alexander Hesse: *Die Professoren und Dozenten der preußischen Pädagogischen Akademien(1926-1933) und Hochschulen für Lehrerbildung(1933-1941)*, Deutscher Studien Verlag, 1995, S. 129-816.)。
- (5) 教育アカデミーの設立過程を政治的観点から検討した代表的な研究として次の二つが挙げられる (Rita Weber: *Die Neuordnung der preußischen Volksschullehrerbildung in der Weimarer Republik. Zur Entstehung und gesellschaftlichen Bedeutung der Pädagogischen Akademien*, Böhlau Verlag, 1984; Gernot Paul: *Lehrerbildung und Politik. Eine Analyse der Auseinandersetzungen während der Weimarer*

Republik, Hamburger Buchwerkstatt, 1985.)。

- (6) 渡邊隆信「ワイマール期における教員養成と新教育運動—アルトナ教育アカデミーを中心として—」『教育研究論叢』第6号、2005年、1-21頁。
- (7) 對馬達雄・佐藤史浩「C. H. ベッカーとA. ライヒヴァイン—教育アカデミーの創設構想とその継受をめぐる—」『教育学研究』第57号第1号、1990年、101-111頁。
- (8) Wolfgang Werth: a.a.O..
- (9) Ebenda, S. 117-120.
- (10) 設立された15校の教育アカデミーのうち、7校は人口20万人以上の都市に設立された。一方、10万人以下の都市に設立された教育アカデミーは5校であった。当時のプロイセンには20万人以上の大都市は16都市であった（人口は、Preußischen Statistischen Landesamt(Hrsg.): Statistisches Jahrbuch für den FreiStaat Preußen, Verlag des Preußischen Statistischen Landesamts, 1931から引用)。
- (11) Preußischen Statistischen Landesamt(Hrsg.): Statistisches Jahrbuch für den FreiStaat Preußen, Verlag des Preußischen Statistischen Landesamts, 1932, S. 151.
- (12) Bericht an das Ministerium über die Organisation des Studiums vom 17. Januar 1931, in: Zwei Jahre Lehrerbildung. Dokumente aus der Arbeit der Pädagogischen Akademie Frankfurt a. d. Oder 1930-1932, Langensalza, 1933, S. 47-50.
- (13) Ebenda, S. 50.
- (14) Otto Haase: Landschulpraktikum der Pädagogischen Akademie Frankfurt/Oder, in: Die Volksschule, 27. Jg., Langensalza, 1931, S. 604.
- (15) Friß Dierschke: Landschulpraktikum der Pädagogischen Akademie Frankfurt a. d. Oder, in: Studentenschaften der Pädagogischen Akademien(Hrsg.), Mitteilungsblätter der Studentenschaften der Pädagogischen Akademien in Preußen, 4. Jg., Verlag Moriß Diesterweg, 1931, S. 194.
- (16) Otto Haase: a.a.O., S. 604.
- (17) Schlußvorlesung der Kollektivkollegs „Unterrichtslehre“, in: Zwei Jahre Lehrerbildung, a.a.O., S. 63.
- (18) Otto Haase: a.a.O., S. 604.
- (19) Ebenda, S. 607.
- (20) Die Studenten ziehen aufs Dorf, in: Zwei Jahre Lehrerbildung, a.a.O., S. 85.
- (21) Bericht an das Ministerium vom 16. Juli 1931 über das Landschulpraktikum, in: Zwei Jahre Lehrerbildung, a.a.O., S. 82-83.

- (22) Friß Dierschke: a.a.O., S. 193.
- (23) Die Studenten ziehen aufs Dorf, a.a.O., S. 85.
- (24) Wolfgang Werth: a.a.O., S. 117.
- (25) 督学官との協力のもとで、実習先として 34 校の国民学校が選ばれた。これらの国民学校のほとんどが単級学校であった (Otto Haase, a.a.O., S. 605.)。
- (26) Bericht an das Ministerium vom 16. Juli 1931 über das Landschulpraktikum, a.a.O., S. 83; Ein Landlehrer über das Landpraktikum der Pädagogischen Akademie, in: Oder Zeitung, 8. 7. 1931.
- (27) Die Studenten ziehen aufs Dorf, a.a.O., S. 86.
- (28) Ebenda.
- (29) Ein Landlehrer über das Landpraktikum der Pädagogischen Akademie, in: Oder Zeitung, 8. 7. 1931.
- (30) Ebenda.
- (31) Die Studenten ziehen aufs Dorf, a.a.O., S. 85.
- (32) Otto Haase: a.a.O., S. 605.
- (33) Bericht an das Ministerium vom 16. Juli 1931 über das Landschulpraktikum, a.a.O., S. 83.
- (34) Friß Dierschke: a.a.O., S. 193.
- (35) Ebenda.

【付記】

本研究はJSPS 科研費（課題番号：17J11196）の助成を受けたものである。

# “Landschulpraktikum“ of “Pädagogische Akademie“ in Frankfurt/Oder

## Focusing on its relation to the New Education Movement

Toshiki FUJII

Graduate School of Nagoya University

JSPS Research Fellow

Fifteen “Pädagogische Akademie” were established in German Prussia during the Weimar Age, replacing the “Lehrerseminar” at the secondary school level. They were new colleges established for the training of elementary school teachers. Many “Pädagogische Akademie” continued their activities until the Nazis ordered them closed in May, 1933.

According to Carl Heinrich Becker (1876-1933), who was the Minister of Education, and promoted the establishment of “Pädagogische Akademie”, “Pädagogische Akademie” placed an emphasis on “Charakterbildung” and “Erziehung”. Therefore, their concept had a few objectives in common with that of the New Education Movement. In addition, the presidents of the “Pädagogische Akademie” in Altona, Frankfurt/Oder und Halle were persons with experience in the New Education Movement. Thus, it was only to be expected that three of the “Pädagogische Akademie” were related to the New Education Movement.

The purpose of this paper is to clarify the activity of “Landschulpraktikum” in the Pädagogische Akademie Frankfurt/Oder and the relation between “Landschulpraktikum” and the New Education Movement. “Landschulpraktikum” was one of the teaching practices, and was carried out over a three-week period in rural elementary schools called “Landschule”.

I clarified the following two points:

1. The class practices in “Landschulpraktikum” were influenced by the New Education Movement. Then, they emphasized the importance of class, based on the child-centered education. Furthermore, the representative activities of the New

Education Movement, “Arbeitsunterricht” and “Projekte” were practiced. As preparation for the class practice, a lecture on “Unterrichtslehre” would be held in the same semester as “Landschulpraktikum”.

2. “Landschulpraktikum” had the function of promoting the practice of the New Education Movement to rural elementary school teachers. According to the professor and student of the “Pädagogische Akademie”, it is clear that the activity in “Landschulpraktikum” was favorably accepted by their teachers. This had a significance in the spread of the New Education Movement. By encouraging rural elementary school teachers through “Landschulpraktikum”, it had the potential to spread the practice of the New Education Movement, which was mainly carried out in a limited range of some private schools and experimental schools, to public elementary schools.

Thus, “Landschulpraktikum” in Frankfurt/Oder was not only affected by the New Education Movement, but it also played a role in spreading the practice of the New Education Movement.